

第二期 第三十三号 (三版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2019.04.20 定有堂書店 発行

普通の本屋

奈良 敏行

春の嵐

南陀楼綾繁

仕入れの旅(上)

鳥居 貴彦

『人間×鬼×偏見』?

五島 朋子

阿佐ヶ台に「あるぼらん」の謎を追う

萩原 俊郎

家族旅行の和平交渉

ワクサカソウヘイ

畳む彼方に

結川 真悟

環ヤポネシア 香港編③

芝野 浩真

世界の国から、こんには

ムラカミヒロミ

坪井日記⑮神戸

齊藤 仁昭

排除の構造を読む

戸國 航

春の川

五百川知子

平成から〇〇へ

山本千津子

鳥取あれこれ その三十二

内田 克彦

「グールドのバツハ」と云ふ……

秦阜 梅林

春の天ぷら

あきの素生

リラックス生活

…… 編集後記

ド拉美リア



普通の本屋

奈良 敏行

(定有堂 店主)

ひと月ほど前に「街の本屋」をはじめたいと相談にみえた方がいた。ランチやカフェと所を変え長時間話し込んだ。書店でもなく街の本屋と絞り込んでいる経緯に興味をもった。ここへ導いたのは石橋毅史さんのいくつかの本ということだった。

ていねいに話をうかがったのだが無理だと思えた。刻(とき)に利あらずというか、伏竜が登るための気流もみえない時代だ。「成功は覚東ないと思いますよ」、「いいんです。それでもやります」とぶれることはなかった。

なにか背水の覚悟と事情があるようだった。

「では成功しなくてもいい本屋をはじめるといいうのはどうでしょう」と提案した。その不転の確固たる意志の強さを見ると、もうすでにあなたは「本屋」なのではないだろうか。書店名を決め、名刺に名乗りとして記すべきだ。恥ずかしければ「準備中」とカッコ付けすればいいのでは？ 名乗りは今において他にない。伏魔のままでもいいのではという選択肢だ。

成功しなくてもいい。でも二つ大切な注意項目がある。①いつでもやり直しが利くこと②手持ちの材料をいかす。なにか特別の提案のようだが、「身の丈」を忘れないというだけのことだ。

そんな相談をして別れた後、閉店後の店内で一冊の本に遭遇した。『スモールハウス』という本だった。一年前にちくま文庫に入り、なんとなく置きっつけてきたものだ。3坪ほどの小屋を紹介する本だ。問題は「小屋」じゃなかったんだ。住む人がはじめて見えた。二日で読了し、「人」を中心に書いた『僕はなぜ小屋で暮らすようになったか』も古書で求めた。すべての始まりは、小学生的ときに突如「僕はいつか死ぬんだ」と気づいた時に始まった。それがすべてだ。そう繰り返して書いてある。関心が身の丈以下に縮小してしまったのだ。

『スモールハウス』の中心概念は「オフグリッド」だ。

わかりにくいことばだが、外部からの電気や水の供給を拒んだ家のことをいうらしい。「成功しなくてもいい本屋」とは「オフグリッドの本屋」だと思った。インフラとしての取次を前提とした「正常ルート」を受け付けなない本屋だ。インフラ供給を必要としないでやっていける本屋が、「成功しなくてもいい本屋」だ。ライフラインを外して、そこに残るものが「身の丈」だ。

成功しなくてもいい本屋は彼のように「初発衝動」に殉じる本屋だ。でもこれは実はベンチャーのイノベーションの起爆力と同じものだ。継続し生き残ればそのまま成功モデルとなるだろう。初発衝動はわかりにくい言葉だ。『音信不通』32号で鳥居貴彦さんが「シヨハツシヨウドウ」と言い換えていたが、それが正しい用法かもしれない。まえにある本を引用して、「未来が、現在起きていることに構造を与えている」「存在しない文の終りは、存在しないが文に構造を与えている」と述べた。

「シヨハツシヨウドウ」を「文体」化すれば、「○○○……、」と「、」（読点）へ向けて展開する構文で「……」の先が未来だ。わたしのように「終わった人」は「……」の向こうにある。「未来」の位取りが違うこととなる。謎々のような話だが、じつはわたしの核心の部分だ。「音信不通」は言葉自体未来を先取りした語

り（ナラティヴ）なのだが、まだ時間があるので、ここでは「謎」のままでもいいかと思う。

オフグリッドのスマール本屋はそのまま身の丈の体現だ。つまりセレクトショップとなる。クオリティの追求は縮小と同義で、ここではセレクトと自分の世界が重なる。

定有堂はセレクトショップなの？ と今日のランチミーティングで取次の転任の方に訊かれた。でも少し違う。流れから好きなものを拾い上げて並べてみせるのでなく、流れ自体を店内に引き込み、その中からピックアップする。つまりリアリティを追求する本屋ではなく。アクチュアリティを簡潔に見せる本屋なのだ。本が未来を取り込んでいる生成の現場に立ち会うのが喜びだと言い換えてもいい。

だから、定有堂は「普通の本屋」なのだ。オフグリッドではないということなのだが、このことを「伝える」とはいま難しい。

（参考）

2019. 0326

石橋毅史『本屋は死なない』新潮社 2011

石橋毅史『本屋な日々 青春篇』トランスビュー 2018

高村友也『スマールハウス』ちくま文庫 2018

同右『僕はなぜ小屋で暮らすようになったか』同文館出版 2015

・本の紹介

（「寄贈いただきました。奈良」）

吉田恭大『光と私語』 いぬのせなか座 2019.3

本はどこかに入口を持つ。出合えなければ縁がないだけ。そんな風にいつもたくさんの本に接している。この歌集に一つだけ入口を見つけ出せた。

本は木々には還らぬとして（しらないが）あ
なただのことをあなたより好き

歌人は一人の人だけに届けばそれでいいと思っているふうだ。だからここでなぜこれが入口か説明する必要もない。しかしここに入口があり出口がある。

歌人の知人二人が、挟み込みの葉に親身な評を寄せている。「解像度を下げる」ことで物事の因果を解体している。歌人が都会で手に入れた「虚の語感」がすばらしい。

きつと「実の語感」は、初期作品とともに、鳥取に置き去りにしていったのだ。

春の嵐

南陀楼綾繁

(ライター・編集者)

私が前年末に出した『一箱古本市の歩きかた』を紹介してくれている。

魚雷さんは私たち不忍ブックストリートが開催した一箱古本市の初回に出店している。

「『一箱古本市』以前、わたしは古本の話ができる友人は数えるほどしかいなかった」。しかし、あちこちの一箱古本市を見に行くうちに、「店主または客として、同好の士と知り合い、その後も連絡をとりあったり、お互いの家を行き来したりするようになった」という。

雑誌掲載時にも読んでいるが、これから一箱古本市に向かおうとするときに再読して、士気があがった。

岡山駅からタクシーに乗り、岡山大学の津島キャンパスの入り口にある（Jテラスカフェ）へ。屋内のカフェスペースから続く回廊で、すでに出店の準備がすすんでいる。

この日の岡山の天気は曇りで、気温も低い。回廊の屋根はあるが、横から吹き付けてくる風をさへぎるものはない。愛媛県新居浜市から参加した「読×舎（よみかけしゃ）」という屋号の女性と隣になったが、二人で「寒い、寒い」と言いながら耐える。そのうち、横殴りの雨まで降ってきた。場所を移動してしのぐ。しかし、すさまじい勢いの風が吹き続ける。「中止レベルなんじゃないの、これ？」と愚痴る。

三月十七日、岡山市で開催された「小さな春の本めぐり」というイベントに参加した。

瀬戸内ブッククルーズというグループが取材していて、これまではプロの本屋の出店が主だったが、今回は一箱古本市も行うという。そのゲストに呼んでくれたのだ。

東京の自宅を朝五時半に出て、のぞみ号に三時間乗った。車中では萩原魚雷さんの新刊『古書古書話』（本の雑誌社）を読む。『小説すばる』に二〇〇八年から十年間連載されたコラムをまとめたもの。一回四ページ（二千四百字）という分量なので、少しずつ読み進めるのに向いている。目が疲れると外の風景を見て、しばらく目を閉じ、またページを開く。

二〇一〇年一月号のタイトルは「一箱古本市へ行く」。

だけど不思議なことに、こんな天気にもかかわらず、開始からお客さんは途切れなかった。むしろ、雨も風も落ち着いて晴れてきてからの方が、人が少なかつた気がする。おかげで私の箱からは目玉本が次々に売れて、終わりごろには箱がスカスカになった。これで交通費の一部が捻出できたとほくそ笑む。

一箱古本市の出店者は20箱ほどで、さほど規模は大きくないが、面白い箱が多かった。古本以外に、自分が関わった冊子とかフリーペーパーを置いている箱が多いのもよかった。

全国の古い町並みをめぐった『昭和街道』、輛の津ミュージアム（広島県福山市）の図録『世界の集め方』、自分の好きな曲の歌詞を「写経」したフリーペーパー『F.U.W.A.K.U』、好きな本についてコメントを書くとお札に手製本のノートをくれる「本のみし」、松山市の老舗バーの歴史をまとめた『サントリーバー露口12ストーリーズ』。亡くなった母の蔵書を売っていた「母の本棚」から、その母が55歳でパリに旅した思い出を書いた冊子を買った。本屋でもネットでも手に入らない、これらの紙モノを入手すると、豊かな気分になる。

イベントが終了した後、市内の中華料理屋で酒を飲み、特急やくもに乗って実家の出雲市へと向かった。

車中で、さつき「古本ハレクモ」でもらった『詩いちや

ん』というフリーペーパーを読む。B5片面で文字だけのシンプルなものだが、「山村暮鳥について」という見出しに引き込まれる。

ハレクモさんによれば、このフリペの発行人は十八歳（二〇〇〇年生まれ！）の女の子で、好きな詩について書いているそうだ。

もうすぐ十九歳になるという彼女は、そのことに焦りを感じているという。その文章はこう結ばれる。

「こんなことを考えていると、自分でも馬鹿馬鹿しくて笑いそうになる。けれど、それでも、今しか感じない、書けないことであるから、こうやってなんとか真面目に文章にしてみた次第である」

おじさんと一緒にされては迷惑かもしれないが、私もこれぐらいの年の頃、同じようなことを考えたことがある。だから、すんと共感した。

こんなフリーペーパーに出会えたのだから、春の嵐に耐えただけの価値はあったわけだ。

仕入れの旅 (上)

鳥居 貴彦

(開風社待賢ブックセンター)

三月十九日。お店の開店を十日後に控え、店主は沖縄にいた。なぜこの時期に。やることは他にたくさんあるだろう。本棚は依然として空っぽだし、棚のレイアウトもきちんと決まっていない。本の発注すらおわっていない。なぜ沖縄に。疑問は尽きなかった。だけど沖縄でもやることがある、そう言い聞かせて飛行機に乗ったのだった。

那覇に行く時は必ず立ち寄る古本屋がある。若狭のちはや書房。店主の櫻井さんは仙台から移住し本屋を丸ごと譲ってもらったという。高い天井の店内に絵本、水木しげるの本、沖縄の暮らしや歴史の本がぎっしりと詰まっている。なんだか居心地がいい。今回も訪問前に電話をしてみると「ちょうどその時期に古本屋仲間が集まって小さな市をやるわけ。よかつたら参加したらいいよ。本の仕入れもできるし」と声をかけてもらった。

朝九時半。浦添市の古本屋、小雨堂。その時間にはみんな準備にあつまってるはずね」と聞いていたのだが店

の前には男性がひとり立っているだけだった。この人が店主だろうか。名前を名乗るとああ、とわかったようなわからないような返事をする。不安。言われるがままに裏の駐車場にまわると、ちはや書房のヒサエさんが現れた。「ようこそ」とにぎやかに手を振っている。よくわからないままダンボールを運んだりする。そのまま特に誰も来ない時間が流れる。小雨堂ははじめて? と聞かれ、はいというとお店見ておいでーと営業していない店内に上がらせてくれた。でも耳は外を向いている。外はヒサエさんの声。目は本棚。絵本が目につく。月刊ごものともがまとまっている。○年○月号以前は○円、○年○月号は○円とざっくり分けられた値札。覚えようとするがなんだかさわさわして値段が目に入ってこない。なんとなく沖縄の本を探している。本を探す、というよりは相場が知りたいという気持ち。棚から一冊抜いてみる。五百円、とつぶやきながら最後のページをめくってみる。七百元。へえ。思ったよりも高い本が多い。でたために五、六冊やってみる。店の外では数人の声がするようになっていた。天久さんらしき声もする。本棚を離れる。

店の前にダンボールが並べられてゆく。各自がもってきたダンボール。二箱の人もいれば十箱近く持ってくる人もいる。なんとなくヒサエさんのとなりで待機。こっ

そりルール解説をしてくれた。アラモノ、トメ、専門用語。入札の封筒、値段の書き方。やり方はシンプル。でもそこに何を書くのが正解なのかがわからない。つぎつぎにダンボールがあげられていく。沖繩の本、小説、ビジネス書、全集。それぞれに封筒が添えられている。天久さんかとおもった声の主はやっぱ天久さんだった。BOOKSじのんの番頭さん。みんなの兄貴。サクライさんの言葉を頭の中で反芻してみる。輪の中心でひとときわ動き回っている。目が鋭い。那覇のジュンク堂ではじめて会った日も目は鋭かった。あのときはすぐに酔っ払ってたけど。突然「ようこそ、なにも聞いていないよ」と大きな声で話しかけられた。でもなんとなくは話を通っていきそうな雰囲気。突然すいません、とぼそぼそ言う。「後でみんなに紹介しようね。演説してください」とか言う。強引なのにやさしい口調。

ウララの宇田さんがすつとやってきた。だいぶ遅れているはずなのだが特に何もなかったかのように自分のダンボールを運んでくる。その姿がちよつとおもしろい。気づいていないのかな、と不安になったところに、おはようございます、と声をかけられた。よろしくおねがいします、と頭をさげる。

コーラとかコーヒーとか飲んでね！とヒサエさんが元気良くすすめてくれる。店の前の歩道がいつのまにか市

会の会場になっていた。十人ほどが値段をメモして入札をはじめている。あれ、もうはじまっているのか。端から順にもう一度覗いてみる。赤い背表紙の沖繩文庫が気になる。十冊まとめて千円から。先週京都で五冊くらい売ってたな。五百円から六百円だった十冊で五万六千円か。「欲しい本は自分の売りたい値段の半額くらいで買い取るといいよ」と善行堂の山本さんが言っていたのを思い出す。なら二千五百円か。トメ千円円が気になる。百円単位で入札するんだろうか。そしたら相場は千二百円くらいなのか。二千五百円なんて書いたら高すぎるのか。わからない。いったん離れよう。そうおもっていたら天久さんが声を上げた。「今日はゲストが来てます。はい、自己紹介」

(つづく)

(編集部注)

「開風社 待賢ブックセンター」 2019.03.29 開店

所在地… 〒602-8125

京都市上京区大宮通樺木町上る菱屋町818

『人間×鬼×偏見!!』

二〇一八年度小鳥の学校発表公演 … 三月の観劇

五島 朋子

(鳥取大学地域学部附属

芸術文化センター)

昨年3月から、首を長くして待っていた「小鳥の学校」発表公演。今年は、小学5年生から中学3年生までの27人の「小鳥たち」が参加し、鬼をテーマにした3つの物語が上演された。何が楽しみかって、一つの舞台を協力して作り上げようとする子どもたちの真摯さとひたむきさが、もう可愛いものにつて！ 続けて参加している子どもが、成長している姿を目撃できるのもうれしい。私に子どもはいないし、人生も後半戦、知っている子どもが舞台に立っているわけでもないが、小鳥たちの演劇を見ることで、数十年後の「未来」が、具体的にかつ切実なものとして目の前に立ち現れてくる。

「小鳥の学校」は、NPO 法人鳥の劇場が 2010 年度か

ら毎年開催している事業で、小学校5年生から中学3年生が対象だ。6月に参加者を募集し、7月から様々なワークショップや活動が行われ、年度末の3月に発表公演が行われる。例年は20名の定員を超えることはないそうだが、今年度は27名もの応募があり、子どもと保護者に面接し、参加へ向けた意欲を確認した上で全員を受け入れることにしたという。今年も、参加27名がそれぞれ上演したい作品を持ち寄り、実際に演じてみて、議論しながら3つの先品に絞り込んだ。その結果、鬼が登場する3つの作品、『おにぼう』（原作…くすのきしげのり）、『桃太郎』（原作…芥川龍之介）、『泣いた赤鬼』（原作…浜田廣介）が順に上演された。原作をもとに、それぞれ一人ずつ子どもが上演台本に仕上げていく。

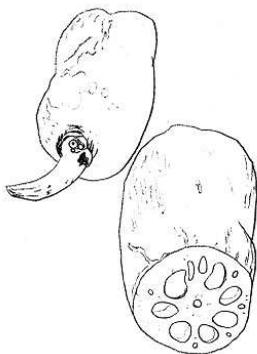
身近に「子ども」のいない生活では、絵本や童話に日常的に触れる機会はないが、これら童話や児童文学には、案外と残酷さや悲しみが横たわっているものが多いことに改めて気づかされる。「おにぼう」では、村を水害から助けようとした鬼の子ども「おにぼう」は、村の大人たちの身勝手さに命を落としてしまうし、芥川の「桃太郎」は子ども向けとは言えないかもしれないが、「鬼征伐」を正義として描く元々の「桃太郎」を、不気味な暴力として照らし出す。共同体から排除される「異なるもの」という役割を担う「鬼」の姿は、同調圧力の強い日

本であらゆる場所に蔓延する「いじめ」、あるいは世界中で見られる宗教や民族に起因する異文化摩擦、そして暴力の象徴とも考えられる。3つ目の「泣いた赤鬼」は、原作では、人間と仲良くなりたい心優しい赤鬼を、親友の青鬼が自分が犠牲になることで助け、自らは身を引いて消えてしまうという悲しい結末だ。が、「小鳥たち」は青鬼を探し出し、ともに仲間を迎え入れるというハッピーエンドを付け加えた。泣きながら歌う赤鬼の熱演の後、排除された者と共同体との和解が描かれる。この結末に、鳥の劇場の指導やアドバイスがどの程度働いているのかはわからないが、子どもたちにとっての遠くない将来が、本当にこのような共生的な社会となることを願わないではいけない、そんな思いに駆られる。

一作品の上演時間はほぼ30分。衣装、音楽、舞台は、27人が3つのチームに明確に分かれているが、役者と音楽演奏には全員が入れ替わり立ち替わり参加している。幕間には、即興でシーンを作る様子のデモンストレーションがあった。小鳥たちが、チームメートの様子を見つづ、自分がどう動くべきか考え、今自分が何を表現しようとしているのか明確な意思を持っていることが、小気味良いくらいに伝わってくる。鳥の劇場代表の中島諒人氏は、小鳥の学校の目的は、演劇を学んだり演技が上手になることではないと説明する。重要なのは、演劇を作るため

に不可欠なプロセス、つまり皆で協力しあうこと、書かれた言葉の意味を考えること、見えないものを伝えるにはどう工夫したら良いのか、を体験することで、思考力、判断力、表現力を身につけていくことだ、と。

子どもたちにじっくりと丁寧に向かい合った、鳥の劇場の俳優たちの熱意と根気強さに深く感服するとともに、来年はどんな小鳥たちと出会えるのか、今からとても待ち遠しい。そして、子どもの未来に少しでも力をつくしたいと、関係者ではない大人さえもそんな気持ちにさせたい。そんな舞台を、一人でも多くのかつて子どもたちだ人たちに見てもらいたいと思う。



Lotus root

阿佐ヶ谷に「あるぼらん」の謎を追う

萩原 俊郎

(新日本海新聞社 東京支社長)

東京に来てから、ずっと気になっていた店があった。

阿佐ヶ谷駅近くにある「あるぼらん⁸⁹」。吉祥寺、荻窪、高円寺に連なるかつての「中央線アングラ文化」のシンボリックな店で、テレビでもよく紹介される飲み屋だ。

ネットで調べてみたら、そのカレーのたたずまいが、妙に似ているのである。骨付きチキンに大きなニンジンがごろり。そう、昔、鳥取市役所の近くにあった同じ名前の「あるぼらん2」。バンダナを頭に巻いた無愛想な店主、カウンターだけの狭い店内、流れるスタンダードジャズ。店主の趣味なのか、溪流釣りの雑誌が置いてあった。

名前はその後「かるだもん」に変わり、今は店主も店の場所も違うが、通い続けてかれこれ四半世紀になる。

◇ ◇ ◇
何かの偶然なのか。究明すべく、まず阿佐ヶ谷に下宿がある支社の若いI君に潜入捜査を命じたら、翌日「独りじゃ怖くて、入れません」と泣きを入れてきた。なんでも外から店内をのぞいたら、天井に真っ赤なチェ・ゲバラのポスター（ある世代以上にはおなじみ）が貼つてあるのが見えてビビったのだとか。

なんだ、そんなことか。高校時代、ずばり「ゲバラ」というあだ名の親友（革命を夢見るイケメンだった）がいた私ならば、大丈夫。二人で狭くて急な階段を上り、演劇やライブハウスのポスターが壁いっぱい貼られた店内へ。マスターがジロリとこちらをにらむ。確か「学生運動の元闘士」とテレビで紹介されていた。うーむ、70年代のアンダーグラウンド・パワーがそこかしこに漂っている。

そういう私も、かつて心は阿佐ヶ谷にあった。初回にも書いたが、永島慎二の漫画「黄色い涙」「フーテン」に心酔し、東京の大学に入ったら新宿のジャズ喫茶で夜通しフーテンをやるんだ、中央線で阿佐ヶ谷の下宿に朝帰りするんだ、と心に決めていた。バカだねえ、まった

◇ ◇ ◇
さて、カウンター席に座るなり目当てのカレーを注文。

すると見るからに強面（こわおもて）のマスターが、ようやく口を開いた。「あの、鳥取の方ですか？」。いきなりのカウンターパンチ！「え、そうですけど、ど、どうして」。二人は、ようやく過激派組織に潜入するも、あっけなく見破られた公安スパイのようにたじろいだ。

でも、マスターは見た目とは違つて、優しく折り目正しい人だった。「鳥取から出張ついでにカレーを食べに来られる方が時々いるんですよ。皆さん、ここは鳥取の店と何か関係あるんですか、と聞かれます」。われわれがいきなりカレーを頼んだので、ピンと来たらしい。

「あるぼらん」の謎はあっけなく解けた。「前の店主は、奥さんの実家がある鳥取でカレー屋をやるんだ、と言つてました。僕はそのあと、ここで居酒屋を始めたんですが、常連さんもいるし、店の名前は彼と同じ『あるぼらん』でいいか、と」。だから鳥取が「2」、引き継いだ年が「89」なのか。

店のメニューは沖縄料理が多い。「まあ居酒屋なもん、で、カレーといつても本当に適當。彼のカレーとはずいぶん違うはず」と謙虚なマスター。出てきた「ミャンマー風カレー」は、まさに往年の「あるぼらん」を彷彿とさせるニンジンがごろり、ほろほろチキンがたつぷりのカレーだった。ただし鳥取に比べて全然辛くないが、マスターの手柄を感じさせる、深くて優しい味わいだった。

「見た目、怖そうな店に思われるんですが、いたつて優しい店です。また来て下さいね」。永島慎二も愛した阿佐ヶ谷。また来よう、あるぼらん⁸⁹！

◇ ◇ ◇

「あるぼらん」という店名は、宮沢賢治の短編「ポラ（ポラーノ）の広場」が由来という。「そこに夜行けば誰でも歌が上手になり」「風を吸えば元気になる」伝説の広場。いい名前だ。

さて、その鳥取の店も弟子たちにバトンタッチし、忽然と消えた店主はどこに行ったのか。風の噂では故郷の熊本県人吉市で唐揚げ屋をやっているらしい。店名は「洛柿亭（らくしてえ）」。どこまでも人を使ったツワモノである。どうやらミュージシャンでもあるらしい。

今、「あるぼらん」の味を継ぐのは鳥取の「かるだもん」「コサジイチ」「ムーナ」、それに松江の「カーリー」と四店もある（まだ食べてはいないが昨年春、鳥取に開店した「ポヌール」もその系列らしい）。

「どつどど どどど」と風の又三郎のごとく阿佐ヶ谷からやって来て、九州に去って行った「あるぼらん」の店主。山陰の地にスパイスから作るカレー文化を根付かせた「偉大な伝道師」と言えるかも知れない。

次回も、東京と大阪にまたがる、再びカレーの話です。

家族旅行の和平交渉

ワクサカソウへイ

(文筆業)

あなたは保守ですか、それともリベラルですか。

いや、政治の話をしたいわけではない。

先日、家族旅行なるものを敢行した。ベトナムを一週間で巡る、我が家にとって初めての海外旅行。メンバーは私と妻、そして五歳になる娘。

人は旅先で、「保守」もしくは「リベラル」、どちらかの思想派閥であることを露わにする。たとえば旅の最中に「蛇の肉が入ったお粥？ 食べたくない！」とか言い出す人は保守側の思想で、「せっかく異国に來ているんだからなんでも食べてやろうじゃないの」という態度の人はリベラル側の思想。こういった思想の相違が、グループ旅行にもめごとを巻き起こしたりするわけだ。

私は「旅先では蛙でも兎でも山嵐でも食べる」リベラル派。妻も同志で、どんな怪しげな路地にもぐいぐい入って行ける。そんなふたりの間に生まれた娘も、きつとりベラル思想の持ち主であろうと高を括っていたら、

これがとんでもないほどの保守派であったことが、今回の旅行で明らかになった。

せっかくの海外旅行、滅多にない機会なのだから、我が子にはその土地ならではの体験をさせてあげたい。そう思うのが親心で、ホーチミン到着初日、私たちはすぐさまローカルレストランへと向かい、フオーや生春巻きを娘にすすめた。しかし彼女は空腹であるはずにも関わらず、手を伸ばさずともしない。初めて目にする食べ物の前に、どうやら拒否反応が出たようだ。じゃあ何なら食べるのか、そう尋ねると「芋」との答え。幸い、そのレストランには蒸かした芋が置いてあった。色彩豊かなベトナム料理を楽しむ両親と、「戦後か」みたいな食事をとる娘。リベラル派と保守派が、家族内ではつきりと分断された瞬間である。

食事が済んで、さあ観光をしようとなったのだが、ここでも娘は保守の構え。どこにも行きたくない、とにかくホテルに戻りたい、そしてずっと寝ていたい、などと協調性ゼロの意見を主張してくる。(一円の年収もないくせに……) と思いながらも、グツとこらえて、「タクシーをつかまえて郊外の遊園地に行こうか?」「それとも、美味しいプリン屋さんがあるみたいだからそこに行ってみる?」などとあらゆる懐柔を試みるが、保守陣営の意志は固く、けっして首を縦には振らない。そして侃侃

諤諤の議論が交わされた結果、その日の我々が行き着いた先は、あろうことかゲームセンターであった。イオンモール鳥取北店でも楽しめるUFOキャッチャーに、異国の地で興じる娘。リベラル派が保守派に敗北した瞬間である。

その後も保守派は毅然とした態度でもって、リベラル派の我々に抗い続けた。バイクだらけの街など歩きたくない、ドリアンが味がするアイスなんて食べたくない、地元の人しか使わない路線バスになんか乗りたくない、コンビニに行きたい、おもちやを買ってほしい、早く日本に帰りたい……。

それでも我々リベラル陣営は、粘り強く交渉を続けた。娘の主張をひとつひとつ飲みながら、隙を突いて「せめて夕飯だけでもヤギ鍋とか食べない……？」とこちらの要望をアピール。だが保守陣営から返ってくるのは「やだ、マック食べたい」という無下な回答ばかりで、リベラル陣営は弱体化の途を辿り始めた。

しかし、我々はこの状況を和平へと導くための切り札を隠し持っていた。旅程の後半に、大きな屋外プールが併設されたリゾートホテルを予約していたのである。プールに目のない娘は、それまでの強硬な保守体制を崩し、シヨッキングピンク色の水着に着替えて、青い水面へと飛び込んで行った。ベルリンの壁、崩壊の瞬間である。

「またあとでプールにたくさん入れるから……」と耳元で囁けば、娘は屋台での食事やナイトマーケットでの買い物にも付き合ってくれるようになった。

こうしてリベラル陣営は交渉の主導権を握ることに成功し、世界には平和が訪れた。

帰りの飛行機で、娘に訪ねた。

「旅の中で、一番楽しかった思い出は？」

すると娘はこう答えた。

「特になにもない。もう二度と行きたくない」

これはすべて、トランプ大統領と金正恩がベトナムで会談を行っていた同時刻の話である。

和平への道は、長く、険しい。

(編集部注)

① 次回は書き下ろし追い込み中にて休載

② 芳賀書房のウェブメディアで、連載開始

ワクサカソウヘイの『エクソダス・フロム・イシヨクジュー／衣食住からの脱走』第一回は「#01」プロlogue「禁断の野草食」

<https://hagamag.com/series/s0061/3203>

畳む彼方に

結川 真悟

(生活者見習い)

大阪に出かけ、欲しくもないものを買って満たされた気になることをやめた。

今日、何を食べ、何を着るか。考える選択肢を減らし、習慣の力で薄弱な意思を支える。生活をシンプルにする手法は、過去の自分と異なる決断をすればいいというシンプルなものだった。

過去の自分と訣別すべく、身の回りを畳む。不要と判断したモノたちは車いっぱいの重みとなつて、リサイクルショップへと運ばれていった。全ての買値を足していけば、そこその値段になるのだろう。それが雀の涙ほどの金となつて返ってくる。しかし、その金で飲んだ一杯のコーヒーは、過去の自分と異なる一步を踏み出すチケット代わりのものだった。眠気でなく重い心を、ふっと軽くしてくれるような心地よさを伴つて。

家に着き、空になった箱を処分するためにトランクを開ける。そこで、処分ではなく、しかし確実に手放さなくてはならないものをまた抱えていることに気付いてしまった。

「結川は取材や話を広げるのは出来るかもしれないけど、畳み方は下手だね」。

職業上、人の話を聞くことは多い。そして、それを基に展開や構成を考える。話し相手の人生とそれが紡ぐ話は多種多様で、その一つひとつに確かな重みがある。

袋川沿いに佇む小さな生態系(IIビオトープ)に棲息していたある住民は、自身の職業に付きまとう繁忙感と、旅人のようにこの地を過ぎ去っていく流動性を言い訳に、いつからかこの生態系と距離をとるようになっていた。幸いこの生態系を満たす水路は穏やかで、漕ぎ出す妨げにはあたらなない。

鳥取にやっできて、六度の冬を越した。その前半、思うように生きられなかったので、自分を変えたいということが後半の生活の大きなテーマだった。

引越して以来解くことなく、ILDKの一角を占領し続けていた段ボール箱を片付けた。アイロンがけが面倒だという理由で買い足したシャツを処分した。毎月のように東京や

だから、自分の創造力などなくても、目の前の人のことを想う想像力があれば、仕事は成り立つと考えていた。聞いた話をなるべく伝えられるよう、成果物には多くを書き込み、盛り込めないかと考えてきた。

学生るときからよく耳にしたコンパスのような言葉に、

「客観公正な事実などない。あるのは誰かの主観を通した現実だ」

というようなものがある。この主観は「誰を取材するか、どのように質問を投げかけるか」という作業を通して与えられると長らく思っていた。

自分自身、この仕事を始めた理由は「自分が知らなかったことを知りたい」という思いだった。自分の欲を満たしつつ、何か形を残せる取材という作業は、苦しくもあるがやりがいのある行為だった。

しかし、最近いくつかの仕事をやる中で、この考えが揺らぎ始めている。その場でじっくり話を聞き、成果物に多くのものを盛り込もうとするのは心地よい。だが、取材相手の思いが乗る成果物が、多くのことが散漫に盛り込まれているという印象を与える結果になったら、それは一種の裏切り、相手への想像力の欠如になるのではないか。

数ある話をどう畳み、どうシンプルで強いものにしていくか。この作業こそ、「主観を通した現実」を生み出す要であり、「自分の知りたいことを知りたい」という当初の動機か

ら一歩抜け出し、自分の仕事に責任を持つための要になる予感がしてきたのだ。

この要石はきつと重い。たぶん、持ち上げるのを億劫だと思ふこともある。でも、過去の自分から変わるために、そして偽善かもしれないが、昔からできれば変わらずに持ち続けたいと思っている目の前の人への想像力を保つために、この石を心の重しにすべく、移動を試みなければならない。

小さな生態系に久しぶりに戻る。通行料は、トランクに置き去りのままだった奈良さんから借りていた本の山と、この原稿。この原稿は、通行料ではなく、添え状のようなものだろうか。

過去の自分から変わるため、この生態系から飛び出すことも何かの足しになるのではと思った。しかし、少しは変わっただろうかかと確かめるための手がかりは、自分の言葉のささやかな反響を聞くことができる、澄んだ水と空気が必要なのだとも思う。

漕ぎ出す妨げにならない穏やかな水路をたどって、さりげなく接岸し、帰還できた嬉しい。どこかに再び戻れるという感覚もまた、過去の自分は知らなかった感覚だから。

もう少し、したい話があるのです。

環ヤポネシア

〜本龍はどこへ?〜

香港編③

芝野 浩貴

(地球探作家)

一九六〇年代は大陸の飢饉のため香港に難民が流入したり、香港の水不足を広東省が飲用水供給したりしていた。貿易港↓工業基地↓金融・サービス業の街と変遷してきた国際金融的には上海、シンガポールと並ぶ都市だが…。使用言語は広東語が主流だが、中国語と英語を話す層も増えている。香港の家族は共働きが多いうえに、少子高齢化で介護を必要とする人も増え、英語が喋れるフィリピン人や広東語を勉強するインドネシア人がメイドとして重宝される。

【北角〜上環〜灣仔〜銅鑼灣】

再び香港島へ移動し、北角(ノースポイント)へ。

ここは上海人が多い。トラムの終点のひとつである北角は庶民の街で、トラムが街市(市場)へ突入していく。建物下の商店は肉屋がメインで、露店の屋台群は野菜・

海産物・雑貨がメイン。トラムの軌道上を人や車が勝手に侵入し、トラムが来ればよける。独特の混在感。この雑多な風景は写真集でもよく見られる。そのままトラムに乗り、中環より西の上環まで移動(65分、40円)歩いていた時には高い店の看板もトラムの心階席から見るとちやうどよい。シンガポールではタバコのポイ捨ては法律違反だが、香港で目立つのはタバコを吸いながら歩く人。上環はウォーターフロント。2011年1月26日イギリス軍は水抗口より上陸。香港が開港すると華人の商業地域として栄えた。1843年当時、上海の人参、鹿の角を南洋で販売。南洋から椰子、香料、布、ゴムを持ち帰り、上環での人参、鹿の角、海産物、干物を販売する商店の発展に尽くした。梅芳街は干物の発祥の地。米の販売は草創期の目玉。インドシナから日本、韓国、中国に販売した。SBSが記憶に残ってるが、それより以前からペストが発生して衛生面確保に努力してきた。生鮮市場の存在は衛生面が改善された証拠。西港城(ウエスタン・マイケット)とマカオ行きフェリーターミナルを結ぶ高架の上で思った。下方に人が歩き、後ろや左右から高架道を歩く人、前方下にはタクシー、バスの群れが別々に、トラムも坂の上から曲がって降りてくる。上方からは高層ビルの向こう側から車が飛ぶ矢のように頭上を通り過ぎる。左の海からはフェリーが。平地で長く続く入り江の上環

に人が出入りする。人種の坩堝を保証する交通インフラを感じさせるスポットだ。

香港の街全体を鳥の目として俯瞰して見れば世界三大夜景として、立体的ネオンは綺麗といえば綺麗なのだろうが、ウォータフロントの港から対岸に聳え立つ高層ビルを魚の目として看板にじつと目をやり、左右に字を追っていくと、香港での主要企業の国がわかる。かつての日本から中国・アメリカにシフトしている。今回の紀行の一番のポイントは、銅鑼灣から金鐘・灣仔までのエリアを見る事だった。雨伞運動から4年経った香港を。さう前の横断路は渋谷のスクランブル交差点のごとく人が渡る。かろうじて生き延びているさう11階にて日本語の本を売っているの、そこで香港人の日本観を考察後、さうさ裏にある独立書店の銅鑼灣書店関係者が2015年に中国政府に長期間拘束されていたことを知る。灣仔まで歩き、三聯書店(サムリョンショーデム)に寄る。ここでも村上本とハラリの本が。科学系は少ない。3階建てで、3階に児童本、文具、雑貨と共にカフェの隣に中高の参考書が置いてあった。1階は家賃が高いので、2階へ3階へと高階で店舗を構える書店は多いらしい。香港人の思想源を提供していたこの書店も、中国政府の管理下に入ったのではないかと思われ、昨夏には不買運動にまで発展した。九龍のあたりはタイ人が、尖沙咀のあ

たりはイスラム系の人が集まり、場所によって雰囲気異なる。運動の残像はないが、図書館や独立書店の存在が独裁や思考停止に抗う。

「アジアの小4龍と本龍」

1国2制度が確立されてるわけでも壊されてるわけでもない。中国本土からは自律しようともがきながら、イギリスやアメリカの資本にかき回される。東京都の半分ほどの面積である香港を歩き続けた。2012年の韓国、2015年のシンガポール、2017年の台湾と合わせて、アジア4小龍をなぞったことになる。1990年代まで、本龍の日本式を真似て成長し、2000年代は、さらに上昇するシンガポール・香港と下降する台湾・韓国と分断されてた4国。今の本龍はどこに向かっているのか。人工知能だらけの社会評論に物申す郡司ペギオ幸夫著の『天然知能』は、ブルース・リーの「考えるな、感じる！」に集約されるが、AI社会で潤うビルに向かって尖沙咀のウォータールフロントの遊歩道にあるブルース・リーの銅像が静観してるのが象徴的である。

其の榮を知り、其の褥を守らば、天下の谷となる (老子)

世界の国から「こんにちは」

ムラカミ ヒロミ

（フライングブックマン）

むしろ、外国発行の切手の方が面白く、特にリベリアのものは、三波春夫の艶姿（なぜか農協マーク付き）に、会場の賑々しい写真や阿波踊り、佐渡おけさなどふんだんに使い、日本の切手より遙かにお祭りにも相応しいものであった。

映画は「ガメラ対ジャイガー」（七〇年三月、開幕直後の公開）の舞台が万博会場。TVの「ウルトラマン」でも「怪獣殿下」が前後編二回で、会場と大阪城周辺を舞台にした（番組は六六年！放映）。

一九七〇年三月一四日、吹田市千里丘陵において、日本万国博覧会が開幕した。
会期は一八三日、日本国民の約半数が訪れた勘定（六千四百万人）になる熱狂と狂乱の大イベントであった。
前宣伝は大変なもので、ガイドブックや特集雑誌など一体だけ出たものやら。

子供の周辺だけでも、漫画週刊誌、月刊誌、学習雑誌いずれも挙ってグラビアの特集を組み、子供向けのガイドブックやスタンプ帳も発売された。

記念切手は、二回発行。小型シート、切手帳も発行されたが、正直、デザインは今一つであった。

小説では、眉村卓が『EXPO '87』（六八年）を、小林信彦は『オヨヨ島の冒険』（七〇年）の中で、ドタバタ騒動の舞台のひとつとして工事中の会場を使っている。漫画家ムロタニ・ツネ象は「パビリオン地獄」を描いた。

幕が開くと、新聞もTVも連日のように人出の多寡や、イベントを紹介し、万博に行かずば日本人に非ず、といった雰囲気さえ醸成されていた。教育現場でも、「学校を休んでも見に行け」と言われたくらいである。

我が家も、開幕ぎりぎりのタイミングで、八月末に出

かけることになった。

真つ先に入ったのは、忘れもしない中華民国館であった。(ちなみに、人民共和国の方は未だ国交がなかった) 巨大な建物の内部に螺旋スロープが巡らせてあって、そこを下りながら一番底を見ると、円形の大スクリーンになっていて、民族衣装の女性たちが踊っている映像が流れている、という趣向であった。これだけのために、バカでかい建物を作るのかとあきれたが、いや、多分、他にも展示スペースがあつたに違いない。ただ、子供は、このスクリーン映像だけを覚えていたのである。

他には、大韓民国館、オーストラリア館、英国館、ブリティッシュユクロンビア館、等々、人の並んでいない所ばかりを選りすぐって(選りすぐられて)回った。その結果、建物の形状以外、殆ど何も記憶に残っていない。

太陽の塔は二日目だった。

呼び物の塔の内部は、薄暗い見世物小屋のようで、エスカレーターを昇りながら中心の生命の木と、それに留まっている進化の過程上の生物たちを眺める訳だが、子供の目にも「ちゃちい」造形で、祭りの露店で売っているパチモンのような色彩であり、形状であった。

胎内巡りを終えると、腕の部分から、お祭り広場を蔽

う大屋根の中に出られる仕組みだった。

三日目は、一点集中、並ぶ覚悟で日本館を目指した。結構、時間をかけて見たと思うが、これまた記憶が曖昧である。万博のシンボルマークを象つた五棟の建物から成っており、映像の部屋があつたのは覚えているが、他に何があつたっけ。

多分、時代の最先端だったのだろう、巨大な、あるいは複雑な形状のスクリーンで映像を見せる館が余りにも多く、どの館も同じような印象しかない。あとは、妙に芸術的なパネル写真と現代アート風のオブジェ。

結局、記憶に残ったのは、建築家たちが妍を競つた珍奇、変奇な、バウイリオン(これだけは確かに面白かった)と、やたら値が高い物販と、ひたすら並び、ひたすら歩いただけ、というものであった。

誰かがテーマを揶揄して「人類の辛抱と長蛇列」と評したのは至言であった。

蓋し、オリンピックを壮大なサーカスとすれば、万国博覧会は巨大な縁日と申すべきであろう。

神戸

坪井日記 ⑮

齊藤仁昭

(長崎書店)

3月某日

神戸の頼れる先輩方が、ケバブジョンソンのワンマンライブを企画してくれた。我々の出演だけでお客さんが入るのか心配ではあったが、毎年の神戸ツアーでの声援(黄色くない野太い野次)を思い出し何とかするだろうと臨んだ。会場入りしたところで先輩方が余裕でDJの準備をしておりその雰囲気で今日は大丈夫だなと安心。機材を下ろして車を停めに駐車場を探すが高いところばかり。神戸は都会だな。しばらくぐるぐる巡って結局会場の裏の駐車場に停めてからリハーサル。30曲ほど演奏予定なので念入りに。

演奏のことはあまり思い出せないがアンコールもいただき、新曲のリズムについても質問されたりしていいライブだったと思う。毎年この会場で会う面々と会話して近況を報告しあえるのがうれしい。お客さんと演奏する側との敷居がないのがいい。京都や大阪、岡山から来てくれた人もいた。

近ごろは0歳児を抱っこし過ぎて腕の筋肉が疲れてしまい演奏中にきついなと思うことがあったので、ライブ前の二日間抱っこをしなかった。酷いし情けない準備だなと思う。華奢なんです。指一本くらいで

抱っこできるほど体を鍛えてこそドラマーではなからうか。要鍛錬。

当日は早めに神戸入りしたので書店を数軒巡った。1003という本屋さんが素敵だった。せんさんと読むそう。どういう意味だろうか。古書メインだが新刊もいくらかそろっていた。リトルプレスもいろいろあり、コーヒーもビールも飲める。奥に大きなスピーカーが置いてありいい音が出ていた。おひとりで営業されているのだろうか。広さも目の届く範囲でちょうどよくビルの3階で日当たりも気持ちがいい。小さい本屋さんってやっぱりいいな。自分でも何だか始めてみたいような気が。ずぼらすぎて無理だろう。

神戸には海文堂書店という書店がかつてあり名店だったと聞く。訪れてみたかった。夏葉社刊『海文堂書店の8月7日と8月17日』の表紙、スリッパの束がたまらない。

3月某日

4月に東京でもワンマンライブが決まっているが現在予約が3名だそう。神戸の5%以下。もういつそ3名で。東京で長く活動していたはずだがいつだってアウェイ感満載だったのを思い出し、そしてそれを忘れないようにしたい。

軽くだを巻く、俺のマイクローフォン

次第に汗は飛び散りミストのように

溢れ出す俺の愛とつば浴び 果てる間際の声で叫べ

ケバジョン ケバジョン てば ねえケバジョン

何？

響きは既に諸行無常

夜明け間近にぎきたすペダルのように

不安と期待の眼差しを背に

サドルは高め、ハンドルは低め

弱り目、祟り目、辺りの目避け

我々日に日に遊びに夢中

だつてほらそろそろ聞こえてくる頃

なにげに足蹴にされた日々の音

呼び覚ませそう、思い起させ

あなたのそばに潜む黒い影

ケバブジョンソン 依然逃走中

やがて和を乱す、俺のマイクロフォン

時空は既にはみ出しあちらの方へ

流れ出す俺の愛とつば

阿鼻叫喚のブラックホールに吞まれ

消えるか、果てるか、またも吐き出すか

答えは風に舞い続けるか

夜空を照らす大いなる銀河

握るペダル、力込め迎える

さあ漕ぎだそう、音の海原へ

風を忘れた奴らのもとへ

すすけたファンクに身を焦がす

耳元でささやくのは恋のブルース

なんだかんだした後は布団でグースカ

うねりだす、夢の扉、ノックして叩いてか

旅路の後に見る夢も旅

ケバブジョンソン 依然暴走中

そしてオーラス、物語もついにラスト

遠い目をして思いを巡らす

KE to da BAB、思えば遠くに got to be

はた迷惑なこの騒ぎにうごめく

幾多の記憶はちとほろ苦く

甘い香りと極上のココ

よくよく見てみりやその色深く

白濁の悪魔に乗り込み

行き着く先は、そう神頼み

あるいは君が僕であったのに

終わらないDNAのハーモニー

行くぞ、行くぞの大合唱

若造に姉御みな一緒に

「バライソさ、行くだよね？ 船長」

もう、四の五の言わずに

黙って行くー！

(ケバブジョンソン「座つて行く」作詞：杉浦真寛)

排除の構造を読む

〔資本論と天皇制〕

戸國 航

(鳥取西高三年生)

その暴力のはけ口、多数派のカタルシスの矛先を氏は第三項と呼んでいる。第三項は権力の中心に在るようではない。そして聖と賤の両義性をもたされている。分かりやすい例は皇族である。彼らは事あるごとに国事に担ぎ出されており、私生活においては全く自由がない。尊き血筋の人と持ち上げられてはいるが人権も何もへったくれないのである。

第三項が生成されるには社会的多数派による承認がいるが、その承認も恣意的ではなく既存の社会体制のうちからいわば無自覚に引き起こされる。この自然的な過程を今村は資本論を引き合いに出して説いている。一般的等価物もまた排除された第三項だというのである。

法の根源に暴力性があるとはベンヤミンの言葉である。私たちは常に国家という権力に身を委ね、法を絶対的な理性として扱う。今村仁司はその普遍的なもの且つ強大なものに疑問を投げかけた勇者、さながらドン・キホーテ伯爵のようである。だが、その勇者も早くに亡くなってしまった。享年六十二歳。それはさておき国家、いやもつと言えばあらゆる共同体の中で暴力が最も陰湿に、また過激に行われるのは誰に対してであろうか。それは社会的少数者・弱者である。彼らは常に社会の中で圧倒的な少数派である。

最近の経済を語る多くの人はまず貨幣から説くが、貨幣もまた元々は商品であった。商品の第一形態、すなわち特定の商品との関係である。次に第二形態。これは展開された商品。一切の商品と比べうる商品である。第三形態となるのは、商品同士の交換関係の中で、一切の商品の価値基準となる商品である。この時点で、第三形態の商品は今までの商品との交換関係からは除外されて、貨幣的性格を持つようになる。第四形態となる商品は貨

幣である。一般的等価物と同じように商品の一切の使用価値を無視して一切を「正確に」比べられるようになる。

このようなマルクス経済学で唱えられる資本の流転、その論理が集団にも適用される。と、そろそろ紙面が残り少なくなってきたので、今回はこれまでにしておく。

(筆者追記：第三項排除論について、今回はとても書ききれなかったので、次回もこの問題について取り上げて書く。次回もつと資本論との連関を掘り下げて書きたい)

春の川



五百川 知子

アシル

霧やラジオの音の掠れたる

あつけなく見せ場の失せて春の雪

蛇穴を出て天敵となる車

きざはしを行き交ふ誰も桜人

白鷺の長き助走や春の川

定有堂教室「読む会」

毎月一回 次回 4月25日(木曜日)

テキスト 『梶谷懐』中国経済講義』中公新書 2018

編集部注：今回にて最終回)



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

んはえらい、ホンマにえらいわ」とテレビを見ながら繰り返し言っている。尊敬していると同時に、次元は違うけれども、長男に嫁ぎ、舅、姑、小姑、四世代の大家族に親戚づきあい、村のつき合いと、ただ一人、我慢、我慢で生きてきた自分と重ねているようにも私には見える。伯母は「美智子さんと一緒の年や」と言い、自分の年齢が同じであることが唯一の自慢だ。私は「きれいな白髪も美智子さんと一緒に、似てるわ」と時々言うことになっている。この姉妹は美智子さまの大ファンである。

「鳥の劇場」の二月公演は三島由紀夫『近代能楽集』から「葵上」「班女」「熊野」「綾の鼓」の四作が上演された。関連して三島由紀夫について評論をされている菅孝行氏と大澤真幸氏によるプレトークも行われた。三島由紀夫について語るとなると天皇という言葉が出てくる。四月には新しい元号が公表される。そうだ、私も頭の中で天皇という言葉を探してこよう。

母は、美智子さん、美智子さんと呼び、日曜日の朝はテレビの「皇室アルバム」で始まる。皇室関係の特別番組も外さずに見ている。私が居間に入ると、「美智子さ

ウラジオストックに住んでいた時、在留日本人も何かの機会に総領事公邸にお呼ばれることがあった。広々としてインテリアも素敵で華やかな外交の場がここで繰り広げられるのだと感動に浸っていたが、そこに飾ってあった天皇皇后両陛下のそれぞれの正装姿の写真が目に入った時、「えっ？」という違和感が起こった。確かに写真楯にきれいに収まって輝いていて、週刊誌でしか目にしたことがないので、ここぞとばかり見たくなるものだろうが、そういう気持ちにはならなかった。在外公館最大の行事である天皇誕生日を祝うレセプションの席であったならば、自然に受け止められたかもしれない。「えっ、なぜここに？」という強い印象が今でも残っているのは、私にとってはあるべき場所とは思っていなかったのだと

思う。

帰国後、ロシア人グループを京都駅で迎えて一日観光案内の仕事をしていたことがある。いつも30分ほど早めに行って新幹線のホームで待っていた。ある時、JR職員や警備員らしき人がホームを仕切り始めた。ロープまで張って。何かあったのかな、有名人でも来るのかなと思っただが、そんなことよりも私のお客さんを乗せた新幹線が遅れた場合にどうするかを考え始めていた。ホームに人はそんなにいなかったが、何となくそわそわした感じがあって、人だかりの方へ行ってみた。掲示版に何も表示されていない新幹線が到着したかと思うと、天皇皇后両陛下が降りてこられた。「写真撮影はやめてください」との声が聞こえていたが、美智子さまを目にした瞬間、涙がポロポロ出てきた。自分でもびっくりした。感動とかではない何か、何だろう、なぜこんなに涙があふれるのか。赤い目で客を出迎え、一日仕事を終えた後に、この涙の理由を何とか自分で説明して納得したい気持ちになった。

いつだったかロシアの友人が浅草寺で観音様を前にして、とめどもなく涙を流していたことを思い出す。その時は、「繊細なんやなく、それとも今まで自分のしてき

たことを懺悔したのか」などと冗談を言いながら理解に苦しんだが、彼自身も驚き、この不思議な感覚と喜びがなぜ起こったのか真剣に自問していた。彼と似たようなことが私にも起こったのかも。何かの存在を前にした時、一瞬にしてこのようなことが起きるのだろうか。

完全に自分というものを捨てて無にならなければ、皇后であることはできないのかもしれない。私には美智子さまが身体を持った人間には見えなかったような気もする。血という生々しいものは一二代へと受け継がれていく。きっと千代に八千代にと続いていくのだろう。私の周りにいたロシア人は日本が好きならばかりで、皆、天皇制を良く思ってくれていた。そしてうらやましいとも。皇帝を殺した我々は……と話は暗くなりがちだった。

昭和天皇崩御のあの日、昭和から平成に変わっていくのを見たあの日、そして今、平成が終わりつつある。三島由紀夫のあの日は私にはないので、共有できない想像すらできない。戦争体験者、震災体験者の話を聞くように、あの日を生きた人々が、それぞれどのように受け止めたかを知りたくなってきた。

鳥取あれこれ その三十二

内田克彦

(地域研究家)

碧川企救男を調べていると、著名な人物との関わりが思いがけず登場して、非常に興味をそそられる。

企救男は、一九九九(明治三二)年東京専門学校を卒業して北海道に渡り、北海道集治監釧路分監出張所(現在の網走刑務所)に行った。安部宙之介は『三木露風研究』の中の「露風の『赤とんぼ』の母」で、

どうした契機からか北海道に赴き網走の監獄で英語を教えていた

としており、長男の道夫は『カメラマンの映画史』で、

熱心なクリスチャンでしたから、あるいは教誨師かとも推理しましたが、形跡は全くなく、音に聞く重刑囚と起居した異色な人間研究だったんでしょうか？(中略)

中島健蔵さんは、「日本にも、『志願囚』の歴史がある。

(中略)君のお父さんは、その一号だよ」と評してくださいました。

と書いている。念のため、一八八八年から一八九二年まで釧路の集治監に教誨師として赴任していた原胤昭(たねあき)を調べた片岡優子著『原胤昭の研究生涯と事業』の中に企救男の名を探してみたが、「原に続いて北海道の集治監に赴任したキリスト教教誨師たちがすべて監獄改良の志を持った同志社卒業生で独占される」とあり、見つけることはできなかった。もともと企救男が行ったのは、北海道の集治監にいた原(当時は樺戸にいた)ら五名の教誨師が一八九五年一月に一斉に辞職した後のことなので、さらに詳しく調べてみる必要があるかもしれない。

一年後、札幌に出て『北海時事』、続いて『北海タイムス』に入社している。かたと結婚したのは一九〇二年で、その年の八月に『小樽新聞』に入社している。

企救男の小樽新聞時代についての研究は、一九七三年に発刊された堅田精司編『碧川企救男論説集 小樽社会主義運動の源流』に始まる。小樽新聞に掲載された主だった論説を収録するとともに、堅田による「碧川企救男小伝(付妻かたの活動)」及び「碧川企救男と北海道の社会運動」の二つの論文を掲載している。

その後、門奈直樹著「明治社会主義言論の流域―碧川企

救男と反戦のジャーナリズム」(『民衆ジャーナリズムの歴史』に所収、初出は『総合ジャーナリズム研究』一九八一年冬季号、第九五号)、荻野富士夫著「碧川企救男小論—初期社会主義と大正デモクラシーの交錯的存在として—」(『初期社会主義研究』一九九九年、一二号)が発表された。今後の研究の進展を待ちたいが、ここではこれらの研究論文に掲げられた資料を引用しながら、企救男の人間関係に絞って書き進めたい。

一九七四年に発行された『明治社会主義資料叢書 社会主義遊説日記』の「IV 第四期社会主義遊説の旅」には、西川光次郎と添田(そえだ)平吉(啞蟬坊(あぜんぼう))による、一九〇七(明治四〇)年一二月から翌年一月にかけての北海道遊説の記録が収録されており、抜き書きしてみる。

一二月二五日 碧川君を訪ふ。始め碧川君不在なりしが暫時にして帰り来り、次いで大滝君も亦碧川夫人の電話により来たらる。

一二月二九日 夜六時より札幌亭にて開会す、(中略) 添田君進歩と貧困を演じ、次に碧川君朝日は八錢になつたといふ奇題にて中等社会の生計難を語り、(中略)次に西川立つて社会腐敗の原因を論じ、コゝで小休して本

と新聞を売り(略)

因みに、「朝日は八錢」とある「朝日」は煙草の銘柄のことで、一九〇四年日露戦争開戦後に煙草専売法ができ、朝日は二〇本入り六錢で売り出されていた。

なお、この演説会のことは、堅田が執筆した、一九九四年三月発行『新札幌市史 第三卷』の「社会主義運動」の項で触れられている。

翌年一月四日には、吹雪の中小樽で、弁士が碧川、添田、西川により演説会を開催、翌五日には西川らは「碧川宅にて御馳走になりかつ二三同志の訪問に接」している。このときのことであろう、添田は『啞蟬坊流生記』(初刊一九四一年)の中で、

その時碧川の細君がしきりに、東京へ出るように碧川にすすめてくれと言っていたりした。

と書いている。その甲斐もあつたのか、その年の春には、碧川家は一家挙げて上京することになるのである。

(以下、続く)

「グールドのバッハ」と云ふ、極めてユニークで特異なカテゴリーがある。

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

I

僕が学生の頃、彼のバッハは、或る極めてユニークで特異なカテゴリーと見做され当時グールドはかなり「エクスセントリックな鬼才」と認識されてゐた。

II

ところが小説家≡上田某の「啓蒙」に拠り、オソラク業界の思惑も複雑に絡んで其れは一気に「正統的」でオーセンティック、殆ど「唯一、絶対の」正しい解釈へと格上げされて了つた「常識」界限。

III

数は力である。業界の涙ぐましひ努力、そしてリスナーの「良識」ヲコントロールしきさういふ方向の認識を「だうしても統一したひ」強い意志が働いて、更に古楽ペリオド楽器ブームとの折り合ひの中で「ピアノ」（及びチェムバロ等）で弾く「バッハの鍵盤楽」の名演と云へば？グールドの録音、或いはG・レオンハルトら古楽の其れしか無いやうな偏つた窮屈な価値観が強いられて了つてゐる。

IV

現在グールドのバッハだけは地方のCD店にも溢れて居り、特に「ゴルトベルク」変奏曲ならば？ 初期と晩年の2テイクをM上レシピに則つて、些かも違はなひやう「正しく」聴き較べるのが「誤りの無い作法」と定着して了つたださうな、すつかり。

V

以前は、ピアノで聴くバッハにも、ロマンティックで19世紀風のケムプフ、新即物主義的でストイックなシュナーベルをはじめ独逸正統派のR・ゼルキンやブゾーニの流れを汲むペトリ等更にアカデミックな○○、クールな△△と云つた選択肢にかなり幅のある中から自分の聴きたひものを選ぶと云う自由があり「趣味」を養ふ余裕があつた。

VI

ところが、それらはほぼ駆逐され尽し専門店の片隅に追いやられ、さつき述べた極めて貧しい状況に。

VII

グールドが「異端」で「鬼才」か？ は措くとして、抑彼のバッハはかなりユニークなもので↓そのユニークさがスタンダードに成つて了ふと厄介だ。

第一彼のやうに流暢にエレガント・自在には誰も弾けやしない。彼の恐るべきヴィルトウオジティ（超絶技巧ぶり）はバッハの偉大な精神性や知性に隠れ考慮されなひ。加へてカナダ出身北欧系の、即物的な（此が好都合

だった)解釈が一つの可能性、では無く主流に。結果どうなったか？

嘗てよく聴かれた、独乙風な、武骨で素朴な味はひの、バロックと云ふよりゴティック寄りで表現主義に近いローカル色濃いバッハが「野暮ったい」と殲滅された。

VIII

グールドのバッハは然し「よく歌う」エスプレシーヴォ(表情豊か)な演奏ではあるが、極めてデジタルに近いドライな側面も併せ持つ為に(カラヤンにも近い)↓彼のやうに弾けなひ、なら？グールド風なコムピューターの演奏の方がベターといふ、畏るべき短絡な(此処にこそ)グローバリズムの思ふ壺に見事嵌った。

IX

更にランドフスカのやうな筋金入り確信犯の「際物」は魔女狩りにあつて抹殺された、オーセンティックで無い、時代遅れな解釈とのかどで。彼らの「正しく無い」バッハ演奏には、無論胡散臭さもあるがその闇の奥には無限の想像力がふんだんに有つてそこにこそ抽象芸術としてのバッハに独自の光を投げかける、天才の閃きも有つただが。

X

もう一つグールドに「バッハ弾き」と云ふ絶対的なレッテルが貼られた。彼にはヴェーベルン、クレネック等新

ヴィーン楽派等をはじめスウェーリンク等バロックでも選曲を含め独自路線のレパートリーが豊富で演奏は雄弁なのだが「グールドはバッハの人、バッハだけの人」と云ふ固定観念は強固なもの。

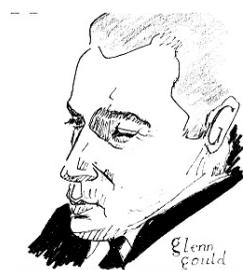
XI

斯くてレコード業界の再編はマーケット「PO」の消費論理だけで憲法やら消費税率の問題よりも断然速いペースで断行、更にリスナーが「趣味」や嗜好を貫き難い時代がやつて来た、ごく当然のやうに、怖ろしくファッショに近い形で、M上は兎も角グールドやバッハの全く想像もしなひところ、で静かに粛々と。

2019.02.14

【今回の二枚】①「V. ベートホーフエン Vln, pf. の為のソナタ 長調作品 96、同「エロイカ変奏曲」作品 35 (G. ソロ) 他 V. メニューヒン Vln, G. グールド Pf. (1960 録音) ②「J.S. バッハ「ゴルトベルク変奏曲」 BWV988K. リヒター Camd. 東京ライヴ

画. A. T



春の天ぷら

あきの素生

(くうねるめがね)



子どもの頃は、近所の空き地でつくしを摘み、ポリ袋をいっぱいにして家に持って帰った。ただ、持ち帰った後、指先を黒くしながら袴を取ったり、佃煮になったつくしを食べたりした記憶はあんまりない。とにかく、草原の中でつくしを見つけて摘むのが楽しかった。

ところで、つくしって、生食できるものなのだろうか。聞いたことがないけれど。もしそうなら、そしてそれを子ども時代に知っていたら、つくし摘みの光景は、あんなに牧歌的なものではなかっただろう。

この植物は食べることができる、と聞くと、おいしいかどうかはさておき、とりあえず食べていた気がする。特にスイバはその最たるもので、食べられるというだけの理由で口にした。生存本能のなせる業なのか。いつかサイバルな状況に置かれるときが来たら、この経験に感謝するかもしれないが、無駄な知識として終わる方が望ましい。ほかに、川のほとりになっている野イチゴを恐る恐る食べてみたり、公園のはずれで見つけた棗のおいしさに感動したり、庭のつつじや田んぼのれんげの蜜を吸ったりと、道端の自然を文字通り味わったものだ。そんな子どもたちが、つくし摘みでなく「つくし食い」に精を出したら：絵的にあまり微笑ましくない。

暖冬、暖冬といっても、結局それなりに寒くて、それなりに雪の降る冬になることが多い。鳥取に来て初めての冬を終える頃、「彼岸の小鳥殺し」という言葉を知った。まだ油断はできないと気を張っていたが、3月も半ばを過ぎて、やっと、もう春が来るんだと思えるようになった。こんな文字通りの暖冬は初めてかもしれない。過ごしやすい冬だった。でも贅沢なもので、雪が少ないとそれはそれで、何だか物足りないような気がする。

春は、芽吹き季節ならではの食材がお目見えし、目にも口にもうれしい。ふきのとう、つくし、菜の花、木の芽。

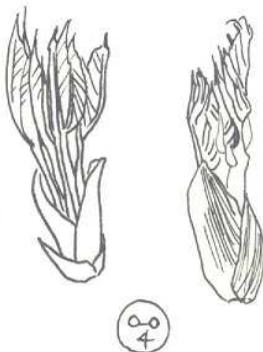
菜の花を好きになるきつかけになつた料理がある。洗つた菜の花の水気を拭き、軽く粉をして多めの油で焼く。塩で味を調えた鯛の出汁に、かたくり粉でとろみをつけて、焼いた菜の花を浮かべる。菜の花の香ばしさと出汁の旨味がよく絡んで、箸が進んだ。鯛の身の白さも美しい。ぜひまた食べたいと思ひ、振る舞つてくれた方に作り方を教わつた。ごちそうなので、自分で作つてみたのは1、2度だが、以来、菜の花であれば、おひたしでも和えものでも、おいしくいただくようになった。

木の芽といへば、スーパーでは、たらの芽を見かけることが多い。惣菜コーナーでも、この時期は毎年、たらの芽の天ぷらが並ぶ。たらの芽はもちろん好きなのだが、より好みなのは、こしあぶらの芽だ。地元では、「ほかの芽」と呼ばれる。ひどい名前だよなあ、と思ふ。以前見たテレビ番組では、木炭にするには不向きで役に立たない木であるという理由で、この呼び名が付いたと紹介されていた。こんなにおいしいのに。おひたしにしたりもするようだが、やはり「ほかの芽」は天ぷらがよい。独特の食感があり、後を引く。

と　　いうより、春の食材は、何だかんだで天ぷらにしよう。ふき味噌は好きだが、何だかいろいろ処理をして、ゆがいたふきのとうをすり鉢でつぶし、調味料と合

わせて、という手間を考えると、天ぷらを選んでしまふし、菜の花だつて、天ぷらにすると主菜になる。塩であつさりいくもよし、大根おろしを入れて温めた天つゆにくぐらせていただくもよし。塩の種類を変えるのも楽しい。抹茶塩、山椒塩、柚子塩、梅塩。食材本来の味、くせになる苦味が殺されることなく、からつと揚がつた衣の歯触りと油が旨さを増す。

天ぷらをたくさん食べられない年齢になつてきた。芽吹いた春を少しだけいただくには、やはり天ぷらがちよつどいい。



リラックス生活



ドラメリア
(座敷わらし)

いつも力んでいるらしい。

先日初めて整体に行き、そこで言われた言葉だ。……あれ、どこかで聞いたぞこの台詞。

実のところ、ここ以外でもほうぼうで言われる。仕事では「適度に力を抜いて、自分だけで背負わないように」と忠告され、やっているスポーツでも「息を吐いてリラックス」と常に注意を受ける。正直なところ意外だ。そんなに緊張したり気負っている気はなく、普通に愉しく過ごしているつもり。もうひとつの頻出ワードは「真面目」だが、これはわからなくもない。実際はコツコツやるのが苦手なキリギリス型だが、見た目が地味なA型なのでそう言われがち。真面目そう、というのは「地味」のポジ変換マジックでしょう。

それにつけても、リラックス。パソコンに向かったまま、ためしに息をゆっくり吐いて、肩からそろそろと力を抜いてみる。……たしかにストンと力みが取れる。怖

がりなので常に身構えているのだろうか。自分ではそれが常態になっているからわからないが、傍から見たら相当力んでいるように見えるのだろう。続けているスポーツではこれが課題で、何かしら方法を見つけて実践できなければ、壁は超えられないという自覚はある。

ためしに、「だんらり、ぐんにやり」をキーワードに日常生活を送ってみようか。なんだかだいがニュアンスが違うが、最初は意識して大げさにやらないと定着しない気がするので、精一杯ゆるんでみよう。ある日わたしが溶けてバターになっていたら、「ああ限界まで頑張ってるんだな」と温かい目で見てやってほしい。



・編集後記・

すっかり春です。道端でつくしを摘みました。子どもの頃はよく食べたいけれど、いま思うと、これは「食べることもできる」ぐらいの草ですね。ちゃんと職場で使いましたよ。ドラメリア(編集長)

定有堂の壁面に掲示されている「本棚の溜息」。発行人の歸山健一さんが3月二九、三〇日とご訪問くださいました。いつもは郵送ですが、今号344号は手渡し。しみじみ感謝と感激。奈良敏行(発行人)